



急性心筋梗塞症例における冠動脈拡張症合併頻度とその臨床的背景、長期予後に関する研究

著者	土井 貴仁
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第18564号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00126147

学 位 論 文 要 約

博士論文題目急性心筋梗塞症例における冠動脈拡張症合併頻度とその臨床的背景、長期予後に
関する研究.....

.....東北大学大学院医学系研究科医科学専攻.....

.....先進循環器医学講座先進循環器内科学分野.....

学籍番号...B6MD5088...氏名...土井 貴仁.....

背景：冠動脈拡張症は冠動脈造影施行症例において少なからず観察される血管の形態異常である。冠動脈拡張症では冠動脈血流の異常から、冠動脈内における血栓傾向を惹起し得ると考えられてきたが、その臨床背景や、長期予後への影響は不明であった。よって、本研究は急性心筋梗塞症例における冠動脈拡張症合併頻度、臨床的背景、長期予後への影響、ならびに抗凝固療法の有用性を明らかにすることを目的とした。

方法と結果:2001年1月から2013年12月までに、国立循環器病研究センターに入院した初回心筋梗塞症例、1698例を対象とした。冠動脈拡張症は冠動脈造影検査にて正常近傍対照の1.5倍以上の部位を認めるものとした。びまん性に冠動脈拡張を呈し、正常近傍対照を設定し得ない症例では、年齢、性別をマッチさせた心疾患を有さない日本人対照症例において、対応する血管径を計測し、冠動脈各セグメントの平均値よりも1.5倍以上であるものとした。冠動脈拡張症合併急性心筋梗塞症例は51例(3.0%)であり、冠動脈拡張は右冠動脈に最も多く分布し(51例中39例、76%)、冠動脈多枝の拡張は30例(59%)、梗塞責任血管の拡張は29例(57%)、他動脈拡張は19例(37%)に認めた。冠動脈拡張症合併例は、冠動脈拡張症非合併例と比較して、冠危険因子が有意に多く有していた(2.9 ± 1.1 vs. 2.6 ± 1.2 ; $p=0.04$)。観察期間中央値4.1年(四分位1.6-7.8年)において、冠動脈拡張症合併症例において主要心イベント【ハザード比(HR), 3.25; 95%信頼区間(CI), 1.88-5.66; $p<0.001$], 心死亡(HR, 2.71; 95% CI, 1.37-5.37; $p=0.004$), 非致死性心筋梗塞(HR, 4.92; 95% CI, 2.20-11.0; $p<0.001$)の発生が有意に高率であった。多変量解析においても、冠動脈拡張症合併は主要心イベント、心死亡、非致死性心筋梗塞における独立した予後予測因子であり、傾向スコアマッチを用いて背景因子を調整したコホートにおいても、冠動脈拡張症合併は主要心イベント発生を予測する因子であった。また、退院時ワルファリン使用例のうち、至適抗凝固療法達成時間割合(percent time in therapeutic range: %TTR)が60%以上のものでは、観察期間中主要心イベントの発生を認めなかった。

結論：急性心筋梗塞症例における冠動脈拡張症合併例は、非合併例と比較して有意に多くの冠危険因子を有していた。主要心イベント発生が有意に高率であり、冠動脈拡張症合併は独立した予後予測因子であった。また、冠動脈拡張症合併急性心筋梗塞症例は、至適な抗凝固療法を行うことにより、急性心筋梗塞の二次予防を行い得る可能性が示唆された。